

焼津市箕沢1号墳の研究

大谷 宏治

要旨 烧津市箕沢1号墳は、焼津市北東部の高草山西南麓に築造された古墳で、これまでに須恵器や象嵌装八窓鏡が出土していることは報告されていた（焼津市教委 1993 ほか）。2010年代に入り焼津市が出土した金属製品の保存処理を実施した結果、鉄塊が象嵌装円頭柄頭と馬具であることが明らかになった。これらは保存処理後の詳細な調査報告がないことから実測調査を行い、詳細を報告した。この報告を基に、象嵌装円頭大刀、鉄具造立聞環状鏡板付轡の評価を行い、それらを副葬された須恵器よりも1段階古く古墳時代終末期前半に位置づけた。また、象嵌装大刀、馬具、鉄鎌、両頭金具の武器の出土数量から武人的性格を持っており、象嵌装円頭大刀・鉄具造立聞環状鏡板付轡は畿内王権との関係を有していたことを明らかにした。箕沢1号墳の被葬者は、古代東海道と瀬戸内が交わるという地域的特性から水陸の交通を管理するような立場で王権に奉仕していたと想定した。被葬者集団は「舍人」「部民の長」などの可能性が想定できるが、その確証はなく、今後さらなる調査研究が必要であることを論じた。

キーワード 象嵌装円頭大刀 鉄具造立聞環状鏡板付轡 古墳時代終末期 志太地域 古代東海道

1 はじめに

焼津市箕沢1号墳から出土した大刀の八窓鏡に象嵌が施されていることは、川江秀孝氏により紹介されており（川江 1992、焼津市史編さん委 2004）、その資料を用いて分析を行ったことがある（大谷 2008a・2018）。その後、焼津市より刊行された『焼津歴文化遺産ガイド 高草山周辺ルート』（焼津市教委 2018）により、円頭大刀が同古墳から出土し、かつ柄頭には象嵌が施されていること、『焼津市歴史民俗資料館報』で保存処理前に報告（片山 2012）されていることを知った（註1）。その象嵌文様は日本列島で既出の象嵌装柄頭の文様とは若干異なるため、象嵌鏡とあわせて分析をするとともに、焼津市内では少ないとされる馬具と装飾付大刀の両者が出土した古墳（片山 2012）として箕沢1号墳の位置づけを探りたい。

2 箕沢1号墳の概要

（1）古墳の位置と概要

位置 箕沢1号墳は焼津市石脇（図1・2）に所在し、朝比奈川東岸の高草山西南麓に築造された6基以上からなる箕沢古墳群のうちの1基である。箕沢古墳群は朝比奈川と旧東海道が交わる場所に位置しており、交通の要衝に築造された古墳群である。

古墳の概要 箕沢古墳群では1・2号墳の発掘調査が実施され、1号墳は円墳とされ（図3）、開墾により南側半分程度が失われているが、規模は石室の主軸に直交する方向で径5.2mである。南北はもう少し長

く、本来は南北10m程度であった可能性が高い。埋葬施設は横穴式石室である（図3）。南側が失われており規模は不明であるが、残存長約3mである。無袖形であったか、残存する一番南側の石材が両側壁とともに大きな石材を使用しており、この辺りで玄室と羨道を区画する擬似両袖型であった可能性が高い。

（2）副葬品

副葬品の出土状況は最終床面、1次床面、1次床面下から出土したとされる（片山 2012）が、最終床面に遺物が集中している。大刀4振、土器類は最終床面のみ確認できることから、石室内への土砂の流入などで石材が紛れ込み床面によくなっていた可能性も排除できないことから、最終床面に副葬されたものとして報告したい。

副葬品には、玉類19点、円頭大刀を含む大刀4振、

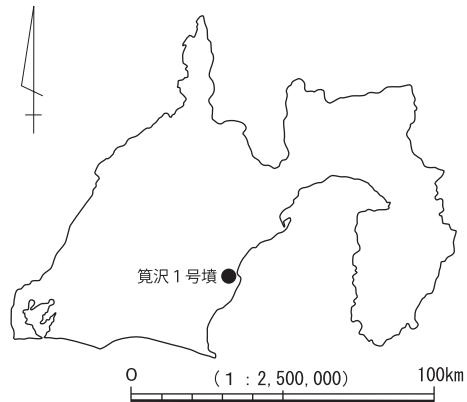


図1 箕沢1号墳の位置

鉄鏃 15 点以上（茎数）、両頭金具 11 点、馬具（轡 1 組と鉸具 2 点）、須恵器 25 点・土師器 1 点が出土している（図3・4、片山 2012、焼津市教委 1993）。

土器・鉄鏃・大刀などについては、焼津市（焼津市教委 1993、焼津市史編さん委 2004）、片山氏（片山 2012）により詳細に報告されているため、ここでは概略を記載し、第3章で象嵌円頭大刀について、第4章で馬具について保存処理後の状況を報告した後、考察を試みたい。

土器 土器は、須恵器返蓋 4、摘蓋 8、無台杯 6、有台杯 5、高杯？ 1、脚部 1、土師器高盤 1 が出土している。時期は、鈴木敏則氏による遠江の須恵器編年（鈴木敏 2004）を援用すると、遠江IV期後半・IV期末・V期前半（7世紀後半～8世紀初頭）に位置づけることができる。

玉類 勾玉 5 点（碧玉 3・瑪瑙 2）、管玉 1 点（碧玉）・ガラス玉 12 点、滑石小玉 1 点がある。このほか不明緑色片岩片 1 点があるが、玉類か判断できない。

刀子 茎数で 7 点出土している。撫閏の両関である。刀子の数量も他の古墳に比して多く出土していることも特徴の一つである。

鉄鏃 鉄鏃は茎が 15 点確認できることから 15 点以上副葬されていた可能性が高い。すべて長頸式で、鏃身が残存するものは切刃の片刃箭式である。茎関はすべて棘関である（片山 2012）。

両頭金具 11 点出土している。いずれも鉄製である。筒部の両側先端は、花形に加工されているものの、残存状況がよくないことから花弁数不明確である。

大刀 4 振出土している。象嵌装円頭大刀については後述するため、それ以外の 3 振りの概要を記載する。八窓鍔付大刀、有窓鍔付大刀、大刀の 3 振である。いずれも両関で、切先はふくら切先である。いずれも鉢元孔は確認できない。4 振のうち八窓鍔付・有窓鍔付大刀の刀身長・幅が大きく、大刀と円頭大刀がそれと比べると華奢である。

また、鉄製環付足金物、責金具が出土しているが分離しており、附属する大刀は不明である。

馬具 後述する鉸具造立闇環状鏡板付轡 1 組と、鉸具 2 点が出土している。鉸具は有機質製鐙を吊るための鉸具である可能性が高い。鉸具の形状は斎藤 F 類であり終末期に位置づけることができる（斎藤 1986）。同様の構造を有する鉸具は、藤枝市高草 5 号墳、白砂ヶ

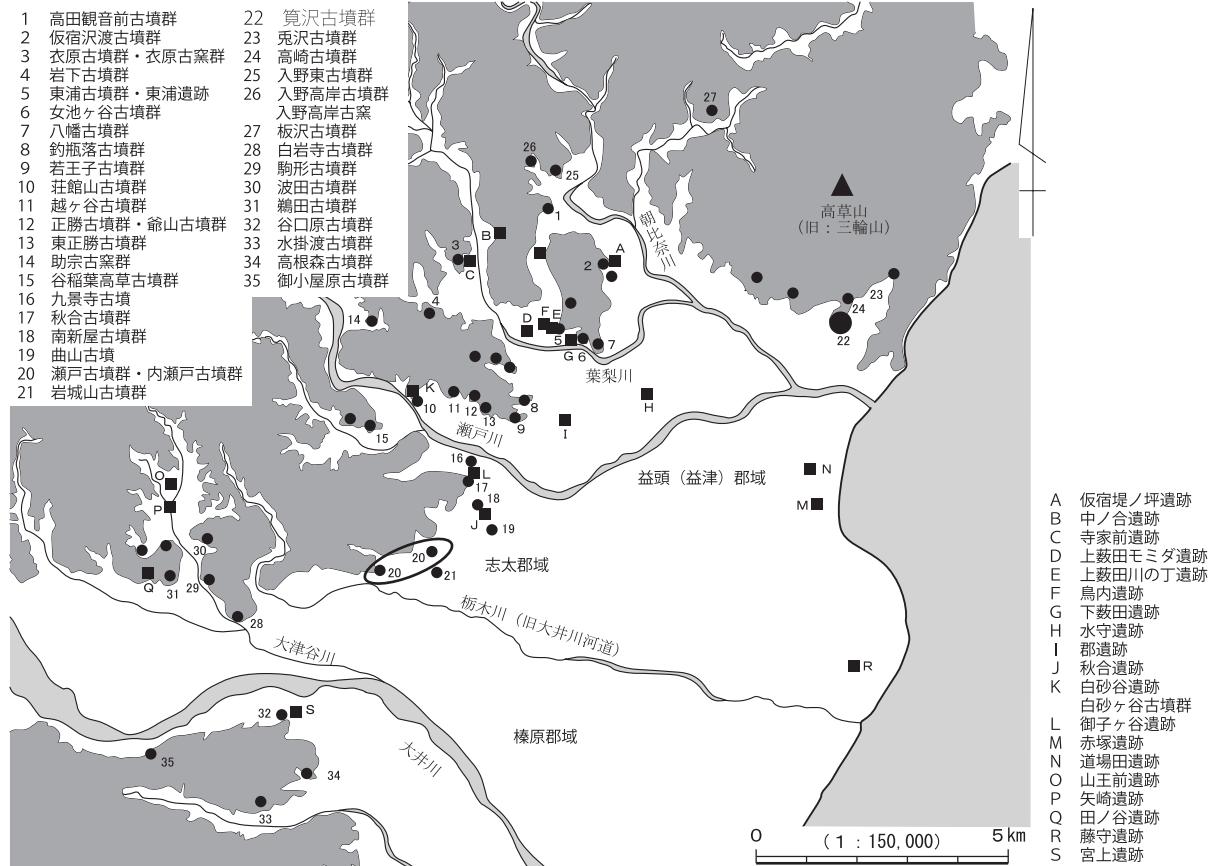


図2 志太平野における古墳時代後期～終末期の主要遺跡と古墳・古墳群の位置

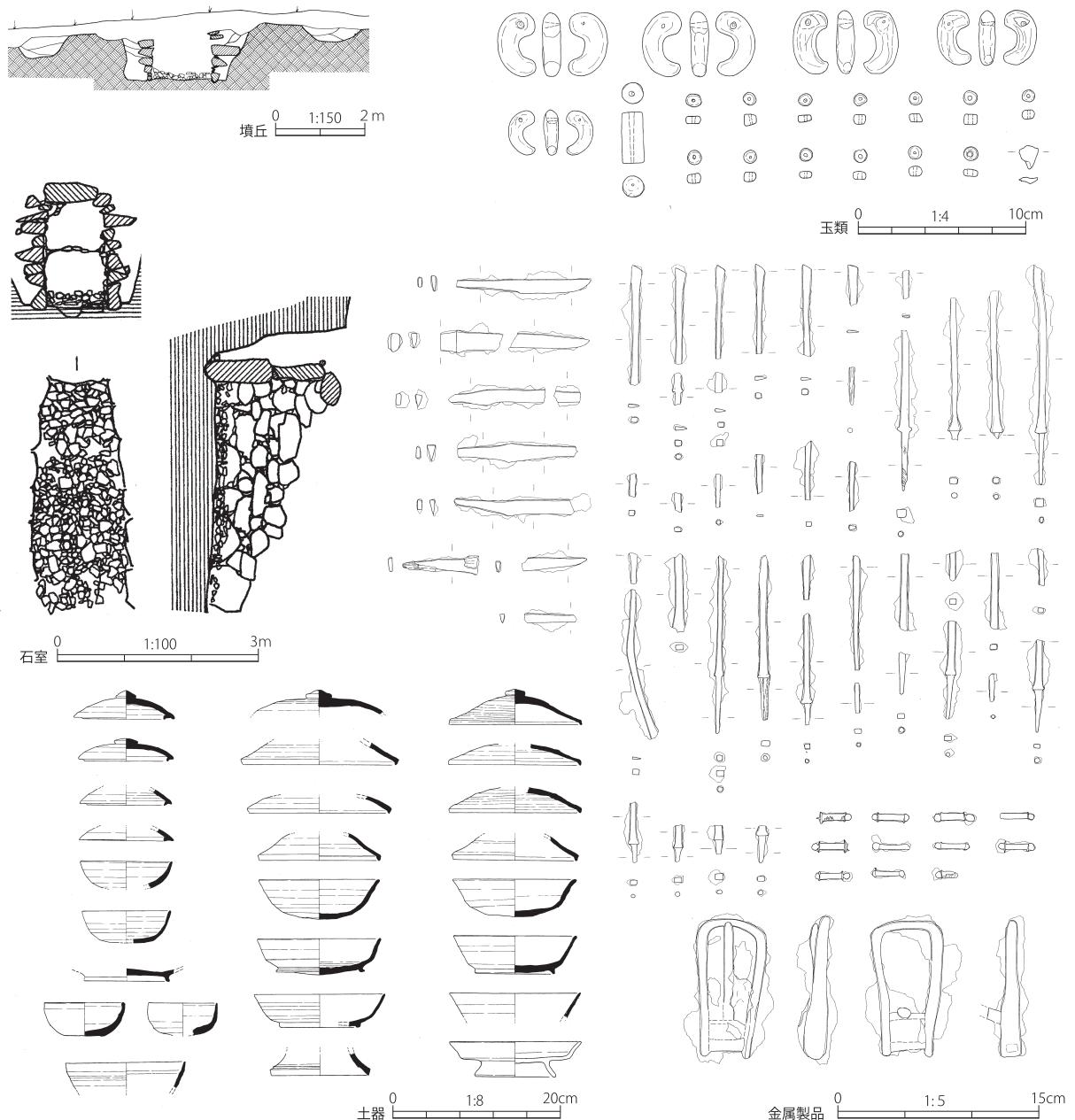


図3 簧沢1号墳の概要①（墳丘、埋葬施設、出土遺物①）

谷C 2・D 10号墳など同時期の古墳で出土している。

ここまでみてきたように、簧沢1号墳は7世紀後半に位置づけられる古墳としては副葬品量は豊富であることが特筆される。

（3）築造と追葬時期

築造時期は副葬された須恵器から遠江IV期後半、IV期末葉、V期前半の、少なくとも2回（時期）の追葬があった可能性が高い。

なお、記録類・出土品は焼津市が所蔵している。

3 象嵌装円頭大刀

（1）象嵌装柄頭

ここでは、保存処理が実施された現在の象嵌装円頭大刀について報告する。

柄頭の構造 鉄製で、柄頭全体に銀象嵌が施される（図5・写真1）。全長7.0cm、最大幅3.8cm、厚さ2.8cmである。鉄板の厚さは、全体的に4mmである。開口部には段が設けられている。段の長さ5mm、高さ1mm（厚さ5m）である。断面は倒卵形である。

柄頭の文様 古墳時代後期後半に見られる筆者のII期の亀甲繋文の連結線が失われー一部二重線で三重円

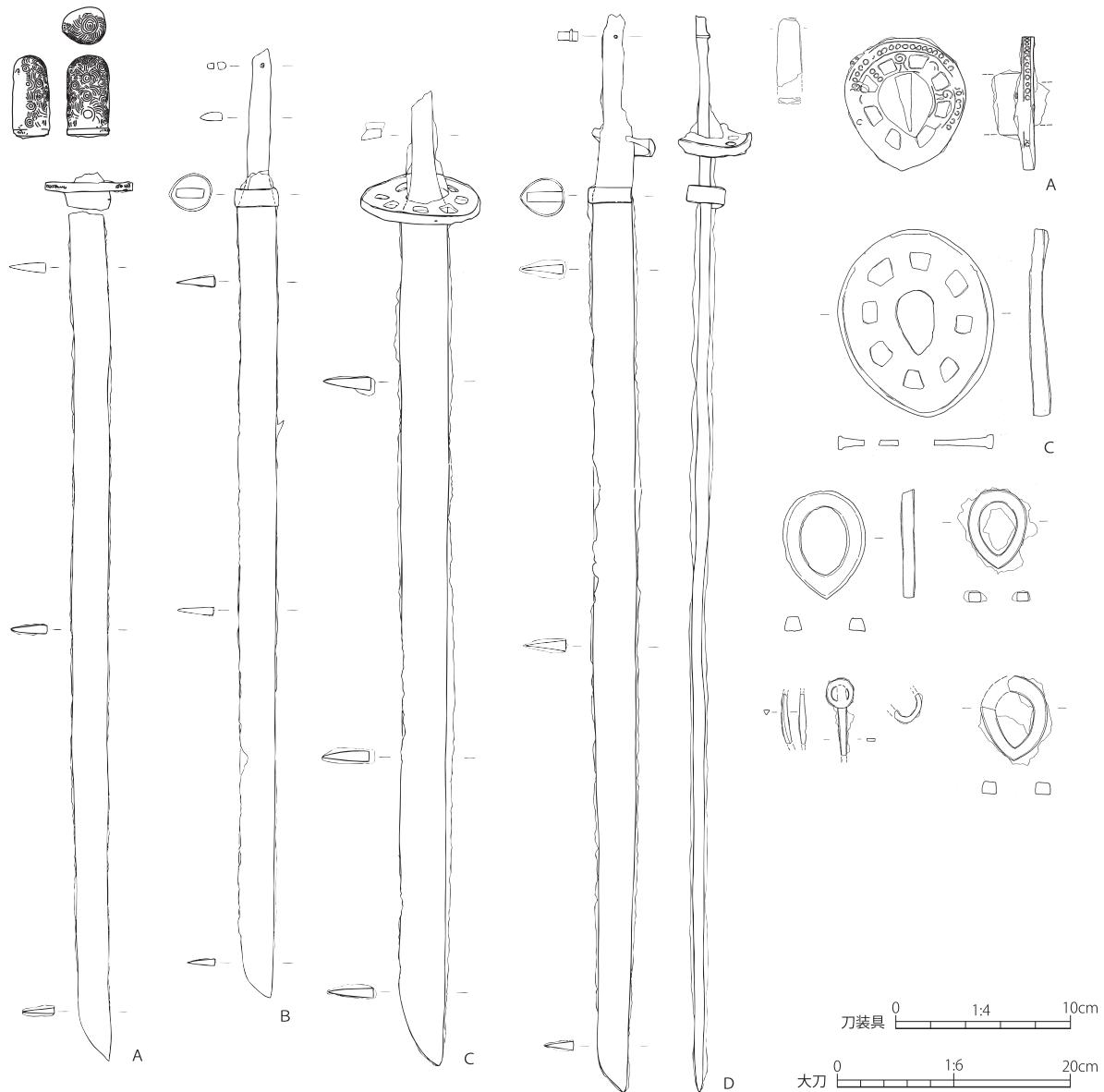


図4 篠沢1号墳の概要②（出土遺物②）

文をつなぐ部分に名残を留めるが、ほぼ連結線が失われている—、第Ⅲ段階のものにみられる三重円文・旋毛文・扇形文（波文）で構成される（大谷2008a）。

佩裏側の残存状況が良好ではなく、現状では鋳で観察できないが、焼津市が所蔵するレントゲン線写真を観察すると佩裏にも佩表とほぼ同様が残存していた可能性が高い（註2）。

佩表は、亀甲文繫文が完全に失われ、懸通孔の周囲に円文を施した後、旋毛文を施す。懸通孔の上部とその左右及び切先側に三重円を3列4段重ねる。棟側は失われているため確定的ではないが、他が4段であることを踏まえれば、同じく三重円が四段であった可能

性が高い。三重円の間は扇形文（波文）を充填する。頂部は五重円で周囲に旋毛文を施す。

柄頭開口部の段には、単円を連続的に施す連珠文が施されている。圈線はない。

（2）象嵌装鍔・鉤・柄縁責金具

篠沢1号墳では、円頭柄頭と離れた位置で象嵌鍔付大刀（図4-A）が出土しており、確実ではないものの柄頭にともなう大刀と推断できる。

象嵌鍔の構造 鉄製倒卵形八窓鍔で、面・耳に銀象嵌が施される。面の外周には二重線の間に円文を連続的に配置するもの（圈線連珠文、圈線円文）であり、

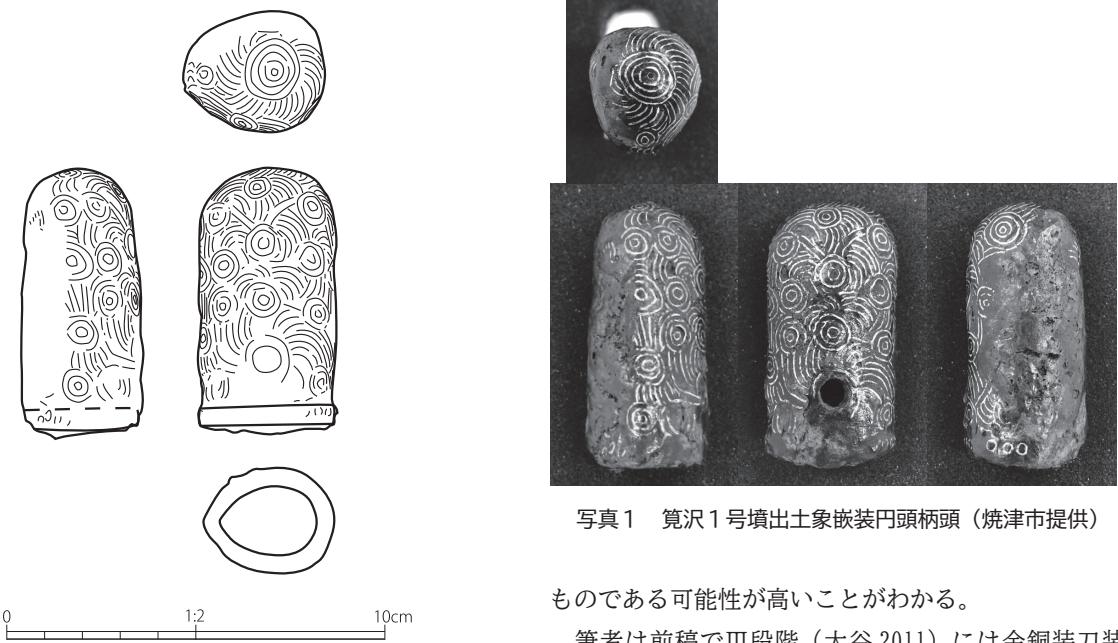


図5 簧沢1号墳出土象嵌装円頭柄頭実測図

窓間にル字形の文様、渦巻文が施される。耳には圏線連珠文を施している。

象嵌鍔の構造 鍔にも象嵌が施されているが、C字文が一部確認されるのみで全体的な文様構成は不明確である（片山2012）。

（3）象嵌装円頭大刀の特徴

象嵌装円頭大刀の拵え 象嵌装円頭大刀は円頭柄頭が大刀本体から外れて出土することが多く、拵えが判明するものは少ない。簧沢1号墳でも柄頭は本体からは離れて出土しているが象嵌装大刀は1振のみであり、後述する同段階（Ⅲ段階、大谷2011）の円頭大刀柄頭の文様と鍔の文様の組合関係から判断して、象嵌鍔を含む円頭大刀拵えである蓋然性が極めて高い（図4）。この場合、簧沢1号墳の拵えは、抜き身で副葬された可能性は排除できないが、鞘（図4-A）には金具を伴わない素鞘で、佩用にも金具を使用しない

ものである可能性が高いことがわかる。

筆者は前稿でⅢ段階（大谷2011）には金銅装刀装具と鉄製柄頭・鍔などを用いる折衷タイプの拵えが確認されるとしたが、石川県須曾蝦夷穴古墳、栃木県トトコチ山古墳、原分古墳例などは拵えがすべて鉄製であることから、Ⅲ期に至っても金銅装刀装具を用いずⅡ期の伝統を保持して鉄製刀装具のみを用いるものも残存することがわかる。簧沢1号墳例もこの傾向に合致している。

象嵌装柄頭の位置づけ 象嵌装円頭柄頭の文様は、亀甲繋文の退化状況から、筆者の分類によるⅢ段階（亀甲=六角形が形骸化し、鳳凰文が全く鳳凰と判別できず旋毛文に変化した段階、古墳時代終末期）に位置づけられる（大谷2011）。三重円文、旋毛文、扇形文の状況から、原分古墳、古柳塚古墳などの類例が確認できる（表1）。原分古墳例の検討の際に論じたように、このⅢ段階でも、須曾蝦夷穴古墳や古柳塚古墳のような旋毛状文が主体の段階と、鷹ノ巣古墳、原分古墳、簧沢1号墳のように旋毛状文が一部のみ見られ、大部分が扇形文（波文）に変化している段階の2小段階に区分することができる（図6）。ただし、いずれも終

表1 簧沢1号墳出土円頭大刀の柄頭と鍔の類例

古墳名	所在地	墳形	規模	柄頭	鍔	面外縁	面窓間	耳	主な副葬品	文献
上蟹沢古墳	宮城県白石市	不明	-	-	八窓	圏線連珠	蕨手	圏線連珠	不明	高橋編2002
鷹ノ巣古墳群	宮城県白石市	円	-	有	-	-	-	-	不明	西山1996・橋本1993
梅本古墳	福島県福島市	円	-	有	八窓	圏線連珠	-	圏線連珠	(不明)	瀧瀬2019
須曾蝦夷穴古墳	石川県七尾市	方	21	有	八窓	圏線連珠	蕨手	圏線連珠	鉄斧他	能登島町教委2001
古柳塚古墳	山梨県笛吹市	不明	-	有	-	-	-	-	金銅装馬具他	古柳塚研2004
旧中道町米倉山出土	山梨県甲府市	不明	-	-	八窓	-	円・ル	不明	(不明)	岡野1994
小丸山古墳	長野県諏訪市	円	20	-	八窓	圏線連珠	圏線連珠	圏線連珠	挂甲・金馬具他	児玉2018・2022
原分古墳	静岡県長泉町	円	17	有	八窓	圏線連珠	円・ル	圏線連珠	金銅装馬具・圭頭大刀他	静岡県埋文2008
東平1号墳	静岡県富士市	円	13	無	八窓	圏線連珠	蕨手	圏線連珠	金銅装馬具・丁字形利器他	富士市2018
東平1号墳	静岡県富士市	円	13	無	八窓	圏線連珠	蕨手・円	連珠	金銅装馬具・丁字形利器他	富士市2018
簧沢1号墳	静岡県焼津市	円	5	有	八窓	圏線連珠	渦巻き	圏線連珠	鉄製馬具	本稿・川江1992

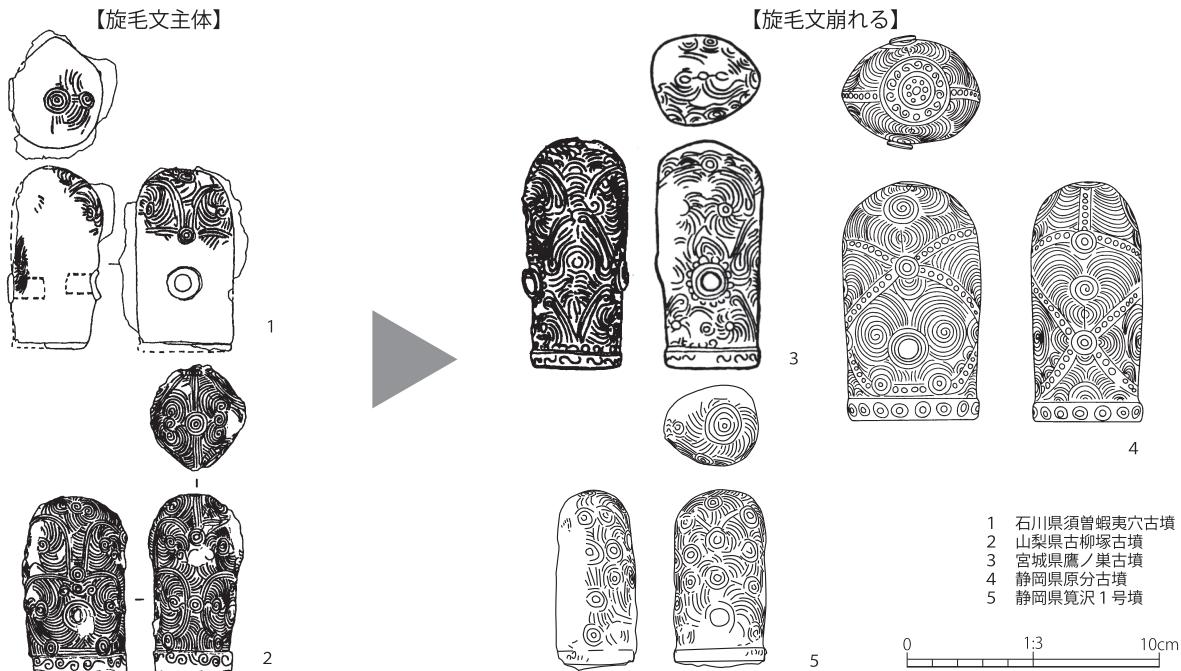


図6 寛沢1号墳出土象嵌装円頭柄頭の類例と位置づけ（大谷2008aを改変）

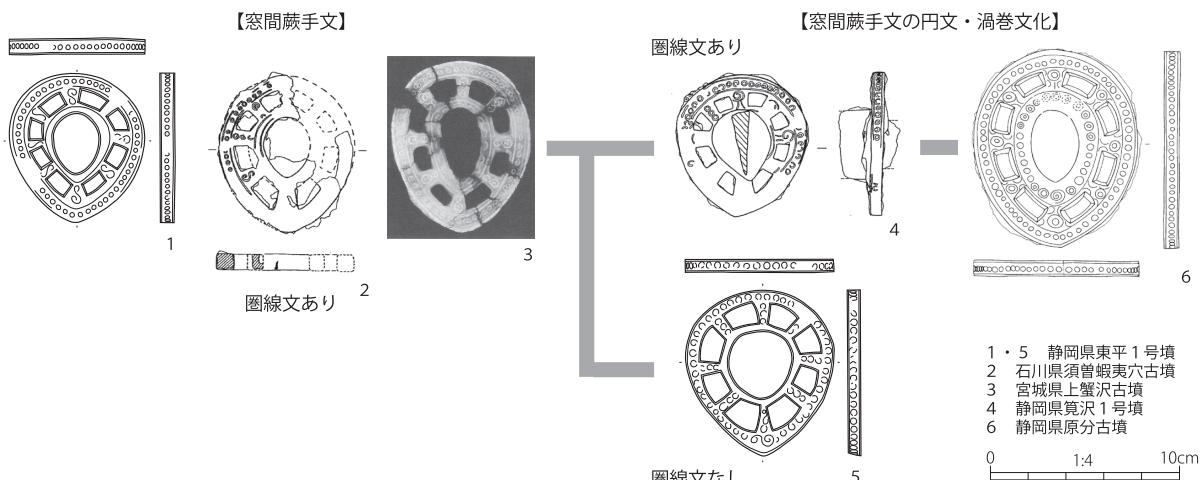


図7 寛沢1号墳出土象嵌装鍔の類例とその位置づけ（大谷2018に加筆）

末期前半の中での変化の可能性が高い。

円頭大刀象嵌装鍔の類例と評価 寛沢1号墳出土の円頭柄頭には、圏線連珠文象嵌八窓鍔が伴う。須曾蝦夷穴古墳、原分古墳象嵌装円頭大刀などこの段階の円頭柄頭に伴う鍔はいずれも八窓鍔で、圏線連珠文である。東平1号墳など鉄製柄頭を伴わない大刀の象嵌鍔にも同様の文様が確認できる（表1、図7）。この文様は古墳時代後期の円頭柄頭大刀などの象嵌鍔に採用される圏線C字文の発展形態であると想定でき（大谷2024刊行予定）、この想定が正しければ、窓間に圏線と円文と蕨手（S字）文が充填されるもの（須曾蝦夷穴古墳、東平1号墳例）から、蕨手文が失われ渦巻文

やル字形の文様が充填されるもの（原分古墳）に変化する。寛沢1号墳は、蕨手文が失われていることから後者に位置づけることができる（図7）。

象嵌装円頭柄頭、象嵌鍔の文様からみて原分古墳とほぼ同時期に生産されたと想定できる。

象嵌装円頭大刀からみた寛沢1号墳の階層的位置

上述した通り、古墳規模や副葬品の詳細が不明なものがあるため、様相が判明する古柳塚古墳、小丸山古墳、原分古墳、東平1号墳では、金銅装馬具や装飾付大刀が出土しており、また須曾蝦夷穴古墳、原分古墳は当該期の古墳では規模が大きいことを勘案すると、畿内王権との関係が深いことや各地域での最有力古墳

や有力古墳であることが推測できる。

箕沢1号墳は、古墳や石室規模は大きくなく、金銅装馬具、金銅装大刀は副葬していないものの、後述するとおり鉄製であるが馬具と大刀を副葬す古墳は志太地域では少なく、また大刀4振、鉄鏃15点以上の副葬は、志太地域では副葬数が多いことから、志太地域では階層上位に位置づけられる可能性が高い。

4 馬具について

(1) 鉸具造立聞環状鏡板付轡

特徴と時期 当墳では鉸具造立聞環状鏡板付轡（以下、環状鏡板付轡は「円環轡」とする）1組が出土している。保存処理が実施されているが、鋸着により展開はできていないことから、ここでは復元で展開図を示した（図8）。本例は鉸具有形固定式（大谷2019）で、く字形引手・衡・鏡板・引手の連結は衡に鏡板・引手を連結する「衡介在型」連結（大谷2008b）であり、通有の鉸具造立聞円環轡である。鉸具の頭部と頸部の境界は不明瞭である。

当轡は鈴木一有氏による蕨手刺金系列であり（鈴木2008）、頸部と頭部の間に明瞭な段差がないこと、長さ6.8cm、幅6.2cmであり、岡安光彦氏によるTK217型式期の典型的なサイズ7.2×6.4cmに近いことから、TK217型式期（遠江IV期前半、飛鳥II期）に位置づけられる（岡安1984）。衡が10.8、10.5cmとこの時期の轡としては長い。

以上の特徴から当轡は、TK217型式期（飛鳥II期）以降に位置づけることができ、当墳から出土している鉸具の時期とも合致する。

馬装 箕沢1号墳では、失われた石室南側に副葬されていれば別であるが、残存した石室内は比較的乱れがなく、馬具が出土した位置もそれほど乱されているとは考えにくいため、馬具で金属を使用するのは轡と鉸具のみであった可能性が高い。

つまり面繫の金具は轡のみで、繫の交差地点は縫い付けられるなどしていた可能性が高い。鉸具は大きさ、2個体出土していることを考慮すると鎧吊金具の鉸具である可能性が高く、木製の壺燈を吊帶で吊り、鉸具で鞍の帶に装着された可能性が高い。この馬装は、古墳時代においては最も簡素な面繫馬装である。

5 箕沢1号墳の評価

(1) 装飾付大刀からみた箕沢1号墳

志太地域では、古手の双龍環頭大刀、象嵌装頭椎柄頭が3点集中するなどの特徴が見出されているが、様相が不明確なものがあり、本格的な分析は行われていない状況である。ここでは箕沢1号墳出土象嵌装円頭大刀の位置づけを探るため概要をみていく。今回は遠江の東端である榛原郡域の大井川西岸の牧之原台地東縁の古墳群を含む志太平野を望む地域（牧之原台地東縁～高草山）の様相を確認する（表2、図9）。

当地域では、出土状況等が明確ではなかったり、報

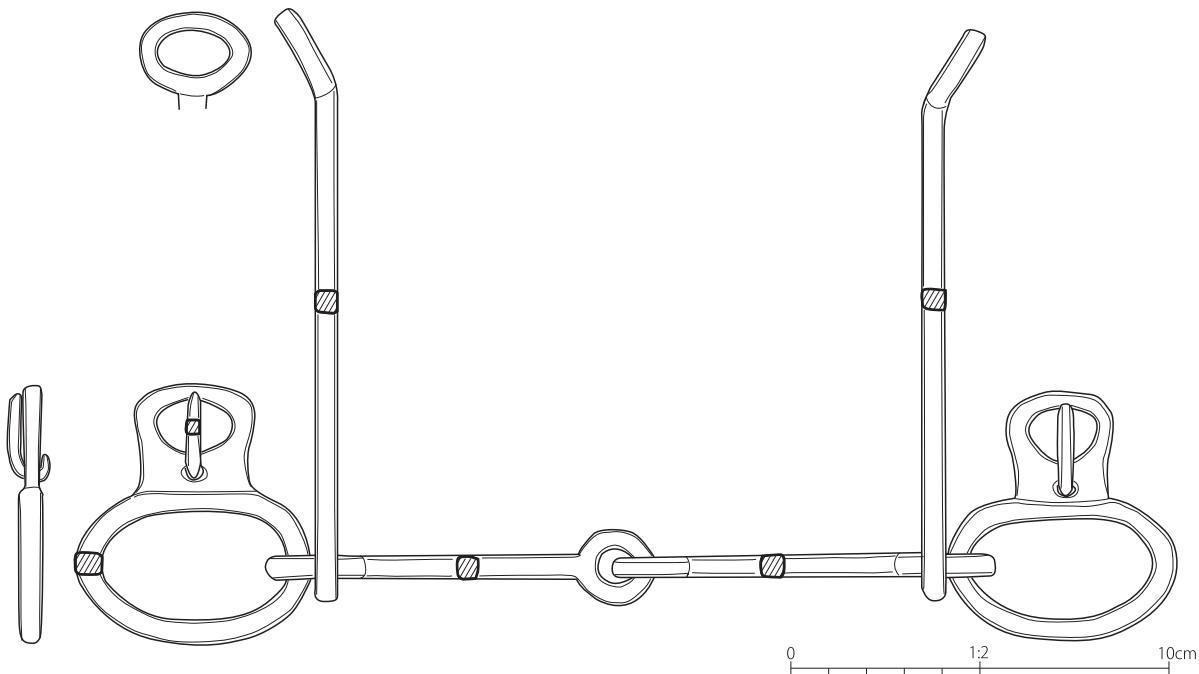


図8 箕沢1号墳出土鉸具造立聞環状鏡板付轡実測図（展開図）

表2 牧之原台地東縁（大井川西岸）～志太地域における馬具及び装飾付大刀出土古墳一覧

古墳名	市町	墳形	規模	埋葬	規模	馬具	金銅装馬具	鉄製馬具	飾	装飾付大刀	刀	鎌
箕澤1号墳	焼津市	円	5.2+	横石	3.0+	●		鉸具造円環	● 象嵌円頭	4	15	
高崎古墳群	焼津市	不明	-	不明	-	-			★ 獅噛環頭	-	-	
高崎3号墳	焼津市	不明	-	不明	-	-			★ 方頭	-	-	
坂本某墳	焼津市	不明	-	不明	-	★ 雲珠		辻金具	★ 頭椎	-	-	
荒芝2号墳	焼津市	不明	-	横石	3.7	●		轡・鉸具		-	-	
板沢9号墳	藤枝市	円	12	横石	6.4	●		大型矩形円環		-	9	
向沢1号墳	藤枝市	不明	-	横石	-	●		素環円環		-	-	
本郷31号墳	藤枝市	円	9.8	横石	4.2	●			★ 金銅装	2	-	
衣原11号墳	藤枝市	不明	-	横石	6	●		大型矩形円環	● 象嵌鍔	4	54	
女池ヶ谷2号墳	藤枝市	円	12	横石	7.3	●		鉸具	● 鉄製円頭	1	-	
女池ヶ谷9号墳	藤枝市	円	6.7	横石	2.6	●				-	-	
八幡2号墳	藤枝市	円	-	横石	8.3	★ 棘付剣菱・馬鐸・馬鈴ほか		大型矩形円環2		4	25	
時ヶ谷5号墳	藤枝市	不明	-	横石	-	●		轡		-	-	
時ヶ谷9号墳	藤枝市	不明	-	横石	-	●		円環		-	-	
若王子29号墳	藤枝市	円	14	横石	3.6+	●				-	-	
釣瓶落2号墳	藤枝市	円	9	横石	? -	●				-	-	
釣瓶落7号墳	藤枝市	円	9	横石	5.9	● 辻金具		吊小型矩形円環		2	7	
正勝4号墳	藤枝市	円	-	横石	-				● 象嵌頭椎	-	-	
爺山6号墳	藤枝市	円	-	堅石	-	★ f字轡・変形剣菱			★ 銅製三輪玉	-	-	
爺山9号墳	藤枝市	円	19	横石	10.6	-			★ 頭椎2	-	-	
東正勝5号墳	藤枝市	円	9	横石	4.5	-			● 象嵌頭椎	-	-	
越ヶ谷B2号墳	藤枝市	円	6.5	横石	6	●				2	-	
越ヶ谷B11号墳	藤枝市	不明	-	横石	5.3	●				1	-	
白砂ヶ谷C1号墳	藤枝市	円	13	横石	9.9	●				-	7	
白砂ヶ谷C2号墳	藤枝市	円	13	横石	8.5	●		鉸具造円環・輪燈	○ 漆装方頭	2	23	
白砂ヶ谷D2号墳	藤枝市	円	12	横石	5.6	●		横長心葉形		1	-	
白砂ヶ谷D8号墳	藤枝市	方	10.5	横石	6.9	-			★	4	-	
白砂ヶ谷D10号墳	藤枝市	円	6	横石	3.6	●		有		2	6	
谷稻葉高草5号墳	藤枝市	円	11	横石	7.3	●		大型矩形円環		1	3	
萩ヶ谷A3号墳	藤枝市	方	12	横石	7	●		大型矩形円環		-	-	
南新屋H3号墳	藤枝市	円	-	横石	-	●		円環		-	-	
内瀬戸1号墳	藤枝市	円	13	横石	6.2	-		有		5	23	
内瀬戸2号墳	藤枝市	円	9	横石	5.2	●		有		3	0	
内瀬戸3号墳	藤枝市	円	11	横石	6.3	●		有		6	6	
内瀬戸7号墳	藤枝市	円	10	横石	7	●		有		-	1	
瀬戸B1号墳	藤枝市	円	15	横石	7.9	●		有		-	-	
瀬戸B20号墳	藤枝市	円	6	横石	3.2	★ 花形容葉		有		-	-	
瀬戸C6号墳	藤枝市	円	-	横石	6.1	●		有		-	-	
瀬戸E9号墳	藤枝市	円	-	横石	4.5	★ 杏葉・馬鐸・馬鈴		有	★ 双龍環頭	-	-	
瀬戸I1号墳	藤枝市	円	20	横石	10.3	★ 杏葉・馬鈴		有	● 象嵌頭椎	4	-	
瀬戸I2号墳	藤枝市	円	-	横石	7.6	●		有		1	1	
岩田山20号墳	藤枝市	不明	-	横石	-	●		有		-	-	
岩城山4号墳	藤枝市	円	15.5	横石	7.8	★ f字轡			有	有		
岩城山9号墳	藤枝市	円	12	横石	3.9+	★ 金銅装馬具		環状鏡板付轡		有	有	
東昌寺古墳	藤枝市	円	-	横石	5.4	●		有		1	5	
波田1号墳	島田市	円	13	横石	6.5	●		鉸具造円環		4	19	
駒形1号墳	島田市	円	9.1	横石	-	●		有		-	-	
駒形2号墳	島田市	方	12	横石	8.7	●		鉄製障泥金具	★ 金銅装	2	-	
白岩寺2号墳	島田市	円	9.7	横石	6.7	-		● 象嵌鍔	5	8		
高根森2号墳	島田市	円	18	横石	14.4	★ 心葉形容葉・鞍・馬鐸		★ 頭椎	2	-		
高根森8号墳	島田市	円	-	横石	4	●		轡・大型矩形円環	★ 単龍	2	9	
谷口原10号墳	島田市	円	13	横石	-			大型矩形円環	● 鞘尻金具	3	-	
谷口原30号墳	島田市	不明	-	横石	-	●		小型矩形円環	● 象嵌圭頭	1	-	
森下1号墳	島田市	円	9	横石	4.9	●		有		6	3	
森下2号墳	島田市	円	22	横石	7.7	●		大型矩形円環		-	-	
宮裏6号墳	島田市	円	12	横石	4	●		大型矩形円環		1	6	
水掛渡A2号墳	島田市	不明	-	横石	4.2	-		● 象嵌鍔	2	3		
水掛渡B1号墳	島田市	不明	-	横石	5.4	-		● 象嵌鍔	1	10		
御小屋原古墳群	島田市	円	10+	横石	-	★ 心葉形容鏡板付轡・杏葉						

※不時発見、詳細未報告の古墳があることから、詳細不明な物があることをお断りする。

※埋葬=埋葬施設 横石=横穴式石室 馬具・装飾付大刀 ●=鉄製 ★=金銅装 ○=その他 飾=装飾付大刀

※f字轡=f字形鏡板付轡 剣菱=剣菱形容葉 円環=環状鏡板付轡 有=馬具出土あり。

※大型矩形円環=大型矩形立間環状鏡板付轡 鉸具造円環=鉸具造立間環状鏡板付轡 小型矩形円環=小型矩形立間環状鏡板付轡

※素環円環=(無立間)素環状鏡板付轡 吊小型矩形円環=吊金具付小型矩形立間環状鏡板付轡

告がなされていない古墳があり、様相が明確ではない古墳もあるが、これまで指摘されている通り（岩原2005など）、頭椎大刀が7点 - 金銅装頭椎大刀4点（爺山9号墳2点、坂本某墳、高根森2号墳）、鉄製銀象嵌頭椎大刀3点（東正勝5号墳=風呂ヶ谷5号墳、正勝4号墳、瀬戸I-1号墳）と最も多く、且つ瀬戸

古墳群から翁山古墳群までの狭い範囲に5点と集中する。頭椎大刀は、全国的な分布の特徴から物部氏との関係が説かれる（豊島2019など）ことがあり、その検証は必要であるが、この地域が特定の職掌や出自によって畿内王権との関係を深めていた可能性がある。

このほか単龍環頭大刀1点（高根森8号墳）、双龍

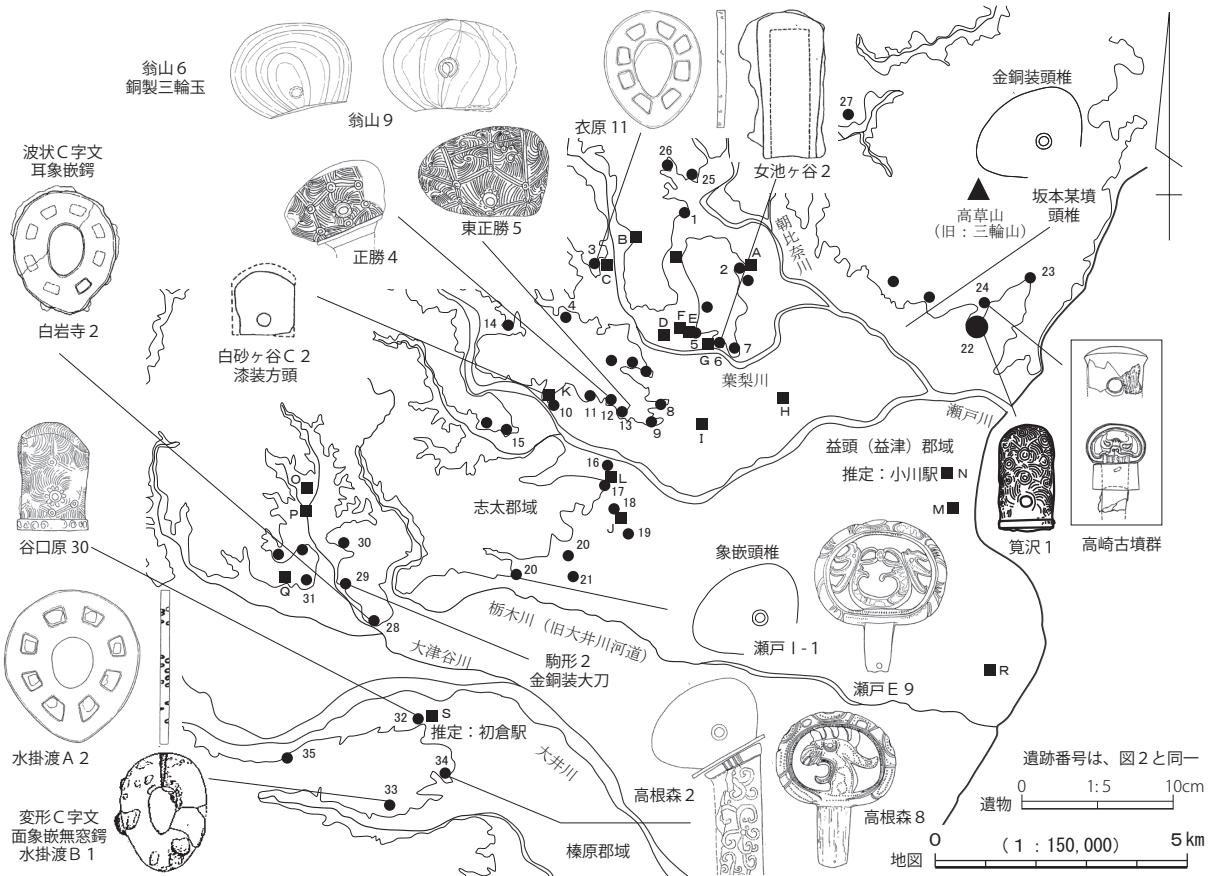


図9 牧之原台地東縁～志太地域の装飾付大刀の分布

環頭大刀 1 振（瀬戸 E 9 号墳）、獅噛環頭大刀（高崎 3 号墳）、楔形大刀（三輪玉付大刀、翁山 6 号墳）、方頭大刀（高崎 3 号墳＝金銅装、白砂ヶ谷 C 2 号墳＝漆塗柄頭）、鉄製銀象嵌円頭大刀 1 振（筧沢 1 号墳）、同圭頭大刀 1 振（谷口原 30 号墳）、象嵌鍔付大刀（衣原 11 号墳、白岩寺 2 号墳、水掛渡 A 2 ・ B 1 号墳）、金銅装大刀（駒形 2 号墳＝有機質方頭柄頭の可能性が高い）が出土しており、象嵌装大刀の割合が高い。なお、金銅装圭頭、円頭大刀は現状で確認されていない。

このように志太地域では、頭椎大刀の集中以外に、象嵌装大刀が集中するという特徴があり、それが筧沢 1 号墳で出土している点は興味深い。

象嵌装円頭大刀出土古墳の特徴 象嵌装円頭大刀の筧沢 1 号墳は、現在も近くに東海道新幹線、国道 1 号線バイパスが敷設されるなど東海道の日本坂ルートにあり、象嵌装圭頭大刀の谷口原 30 号墳も牧之原台地から志太平野へ抜ける東海道ルート上に位置する。筆者は、原分古墳例などの分析で、滝沢誠氏（滝沢 2000）や富田和氣夫氏（富田 2001）の意見を参考に、象嵌装大刀を有する古墳は交通の要衝に位置する古墳が多いことを想定した（大谷 2008a・2018 など）が、

筧沢 1 号墳、谷口原 30 号墳も同様の性格を有すると想定できる。

また、同時期の象嵌装円頭大刀は、石川県（能登）、山梨県（甲斐）、静岡県（駿河）以東のみで現状確認されていることを勘案すると、畿内王権の東国政策の一環で東日本の東西交通に長けた有力者に配布された可能性を考えたい。

(2) 馬具からみた筧沢 1 号墳

藤枝市仮宿堤ノ坪遺跡では、古墳時代前期後半とされる馬鍬（藤枝市史編さん委 2007）が、同西ノ宮 1 号墳で中期中葉の鏹轡が出土しており、志太地域は、東海地方で最も早く馬具を導入した地域の一つである。一方で、中期後半以降は明確ではなく、後期中頃～後半の、翁山 6 号墳の f 字形鏡板付轡、変形剣菱形杏葉、八幡 2 号墳の変形剣菱形杏葉まで待たなければならない。この時期以降、瀬戸 B 20 号墳の花形杏葉、岩城山 4 号墳の f 字形鏡板付轡、高根森 2 号墳の金銅装鞍、金銅装十字文心葉形轡、御小屋原古墳の唐草文心葉形轡・杏葉などとともに円環轡をはじめとする鉄製轡が多数確認される（図 10）。金銅装馬具は東海道

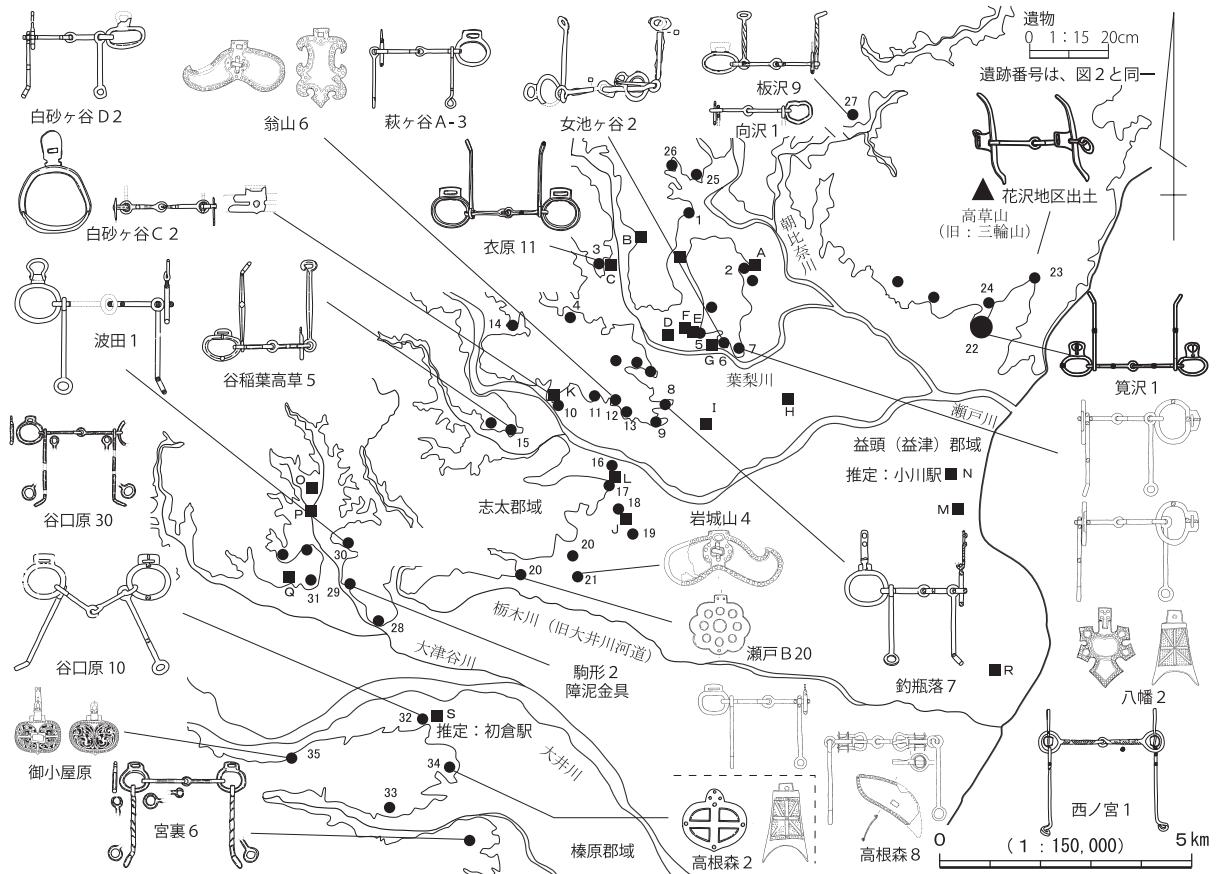


図 10 牧之原台地東縁～志太地域の馬具分布

ルート沿いに築造された古墳群に副葬されており、鉄製馬具はやや奥まった地区に築かれた古墳群に副葬される傾向がある。金銅装大刀も同様の傾向を示す。

志太地域の鉄製轡 志太地域の鉄製轡は、20基から出土しているが、未報告で形式が不明のものがあるため現在の明確なものを確認すると、円環轡では、吊金具付小型矩形円環轡1点（釣瓶落7号墳）、素環円環轡1点（向沢1号墳）、小型矩形立聞円環轡1点（谷口原30号墳）のほかは、畿内王権との関係が深い大

型矩形立聞円環轡（八幡 2 号墳ほか）と鉸具造立聞円環轡（箕沢 1 号墳ほか）が大部分であり、東遠江～東駿河の傾向と一致する（図 11）。

鉄製轡の時期を確認する（図12）と、大型矩形立聞円環轡は後期後半から終末期まで連続的に存在するが、鉸具造立聞円環轡は、後期後半に全国的にみても鉸具造立聞円環轡の初現例がある一方で、終末期に箕沢1号墳例を含め3点が出土している。

古墳時代終末期では、鉸具造立聞円環轡を有する

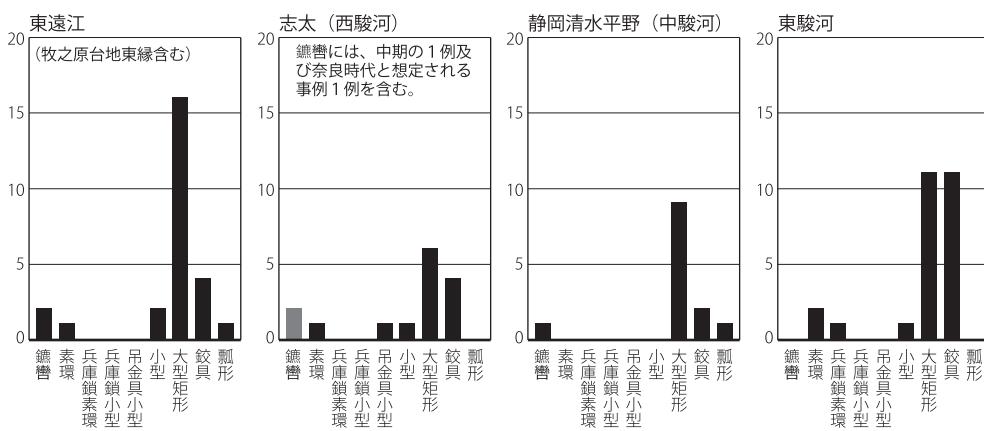


図11 東遠江、志太地域、静岡清水平野、東駿河の鉄製轡形式別出土数（古墳時代後期から終末期）

箕沢1号墳（鉄製銀象嵌円頭大刀）、女池ヶ谷2号墳（鉄製円頭大刀）、白砂ヶ谷C2号墳（漆塗方頭大刀）が出土する一方で、大型矩形円環轡は高根森8号墳以外は、馬具のみで装飾付大刀は伴わないことか

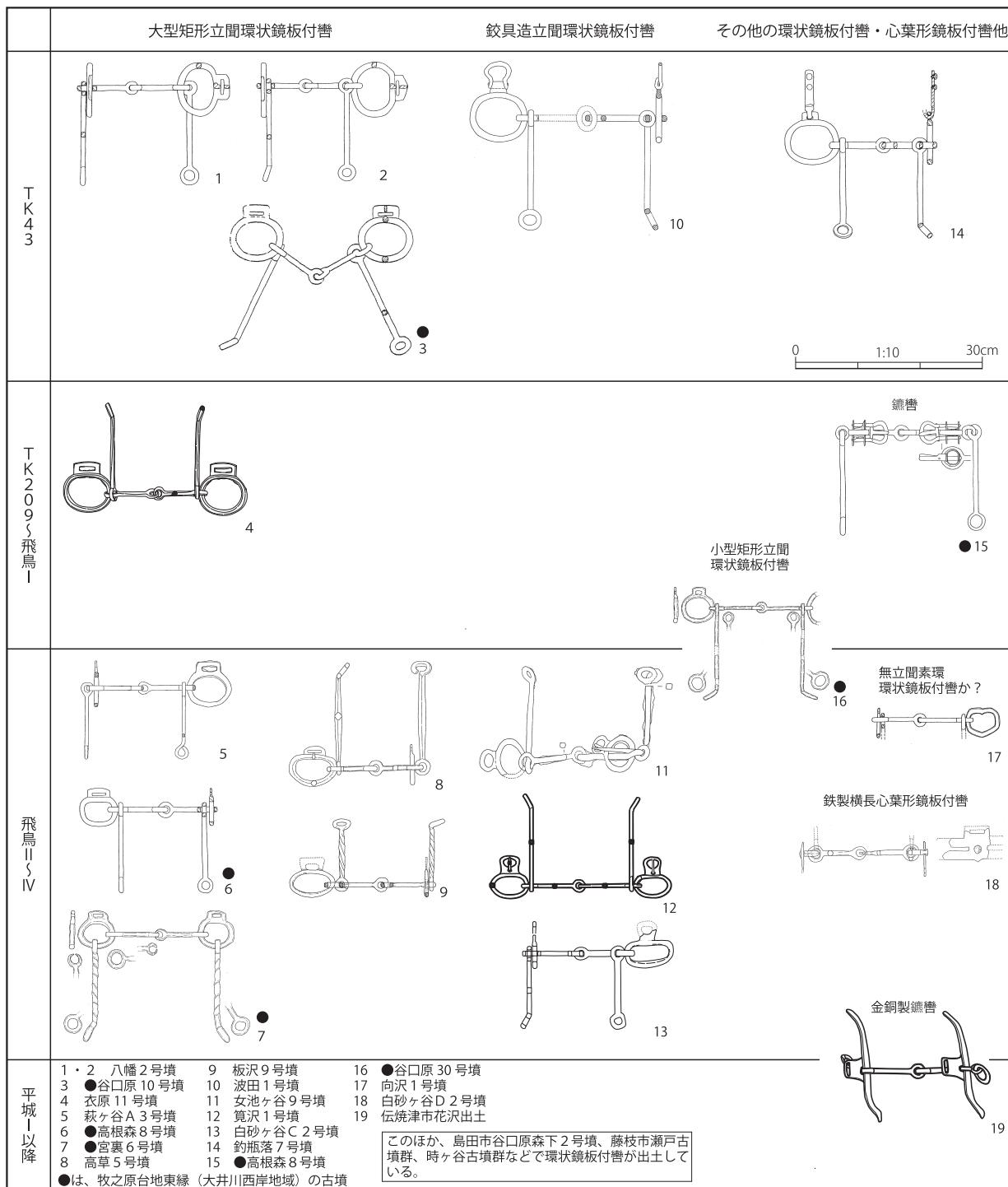


図12 牧之原台地東縁～志太地域の鉄製轡（一部金銅装飾轡含む）の展開

ら、副葬品からみると鉸具造立間円環轡の方がやや階層が高い可能性がある。

志太地域の馬匹生産 今回の集成から約40古墳で馬具が、20古墳で鉄製轡が出土している。うち瀬戸古墳群・内瀬戸古墳群で10基と調査された約110基のうち10%程度から馬具が出土している。近在の岩城山古墳群を含めれば、志太地域の出土古墳の1/4がこの古墳群とその近在に集中する。この瀬戸古墳

群・内瀬戸古墳群では、東海地方では稀有な馬骨を副葬する内瀬戸1号墳（旧・瀬戸1号墳。註3）、瀬戸B17号墳が存在する。馬具の集中、馬骨出土古墳の存在から筆者は志太地域で馬匹生産を想定した（大谷2023a）が、瀬戸古墳群・内瀬戸古墳群に埋葬された集団がそれを担っていた可能性が高い（岡安1986）と想定する。また、古墳時代終末期には、白砂ヶ谷古墳群で4基とやや集中しており、終末期にはこの被葬

者集団も馬匹生産に関係した可能性がある。さらに、大井川東岸の谷口原古墳群でも5基以上から出土していることから、この地域も馬匹生産が行われた可能性がある。

一方、谷稻葉高草古墳群、萩ヶ谷古墳群などでは群中最大の古墳や規模が大きい古墳から鉄製馬具が出土しており、基数も多くはないことから、馬匹生産そのものを行っていたわけではなく、馬を利用する活動を行った被葬者であった可能性が高い。

箕沢1号墳は轡1点で、周囲では馬具が出土した古墳群はないことから、馬匹生産に直接関わっていた可能性は低い。上述した馬を使って交通の要衝を管理するような立場にあった可能性がある。

(3) 装飾付大刀と馬具の共伴からみた箕沢1号墳

箕沢1号墳は焼津市域で初めて馬具と装飾付大刀が同一古墳から出土した事例とされ（片山2012）が、志太地域では、瀬戸E9・I-1号墳、翁山6号墳、衣原11号墳、白砂ヶ谷C2号墳、駒形2号墳（表2）があるが、それほど多くはない。瀬戸古墳群の2例と翁山6号墳例はいずれも大刀・馬具とも金銅装であり、駒形2号墳は金銅装大刀に鉄製馬具である一方、衣原11号墳、箕沢1号墳は象嵌装大刀と鉄製轡、白砂ヶ谷C2号墳は漆装方頭大刀と鉄製轡である。古墳・石室規模や副葬品をみると金銅装のものを有する方が階層的に上位にある可能性が高く、その中心（階層的上位の集団）は当地域最大の前方後円墳である藤枝市莊館山1・2号墳に近在する瀬戸古墳群から翁山古墳群、-のちの志太郡衙（御子ヶ谷遺跡）、益頭郡衙（郡遺跡・水森遺跡）が設置される地区-である。その中心地域からは外れるものの、志太地域では共伴が少ない馬具と装飾付大刀を有する箕沢1号墳に注目する必要がある。

象嵌装大刀と鉄製轡 東海地方では象嵌装大刀は鉸具造立聞円環轡、大型矩形立聞円環轡と共に伴することが多く（大谷2023b）、箕沢1号墳例も合致している。志太地域に多い、大型矩形立聞及び鉸具造立聞円環轡は、畿内王権との関係が深く（岡安1984、宮代2013）、象嵌装大刀も同様と考えられており、筆者はその両者を有する古墳の被葬者は畿内王権との直接的な関係を有し、軍事面での活躍を期待されていたことを想定している（大谷2023b）。

(4) 武器からみた箕沢1号墳

大刀 当墳では象嵌装円頭大刀を含む4振が出土しており、円頭大刀以外は素鞘の簡素な大刀である。筆者は前稿（大谷2023b）で大刀を多量（6振以上）に副葬する古墳の位置づけを確認したが、4振はこの分析からみれば多量とは言えないまでも、志太地域では6振の内瀬戸3号墳が最多で、5振（短刀を含めると7点）の内瀬戸1号墳以外では、5振の白岩寺2号墳、4振の衣原11号墳、箕沢1号墳、白砂ヶ谷D8号墳、波田1号墳となり、4振でも副葬数が多いことがわかる。古墳時代終末期に限れば、白砂ヶ谷D8号墳と並んで最多である。

鉄鎌 当墳では鉄鎌は尖根片刃箭式のみ15点（註4）が出土している。15点という点数は、さほど多いとはいえないものの、志太地域では、現状で衣原11号墳の54点が最多で、箕沢1号墳の15点を超えるのは10基強である。中でも30点を超えるのは衣原11号墳と越ヶ谷B4号墳のみである。また、小規模墳では、平根式と尖根式を少数ずつ組合せて保有することが多いが、当墳は尖根式片刃箭式のみであることも特徴である。

したがって、東駿河（菊池2016）などと比べると副葬点数は多くはないものの、地域内の傾向としては、15点でも多いといえる。

両頭金具 当墳では、鉄製両頭金具11点が出土している。志太地域では、現状で最多数であり、複数の飾り弓が副葬されていた可能性がある。

以上、武器についてみてきたが、志太地域では、大刀、鉄鎌、両頭金具とともに多い、あるいは（時期的にみると）最多であることから、武器・馬具に被葬者の特徴が表れていると想定でき、上述した装飾付大刀や馬具で想定した通り、武器からも武人的性格が想定できる。

6 結語

(1) 箕沢1号墳被葬者の性格

本稿では、箕沢1号墳出土象嵌装円頭大刀柄頭及び鉸具造立聞円環轡の保存処理後の状況を調査・報告し、象嵌装円頭大刀、馬具を主に、大刀、鉄鎌、両頭金具を含めて分析を行った。この分析では、象嵌装円頭大刀は、筆者の象嵌装大刀編年のⅢ段階、終末期前半（7世紀前半～中頃）に位置づけることができること、その中でも若干新しい文様構成であることを述べた。鉸具造立聞円環轡、鉸具、鉄鎌も象嵌装大刀と同時期である。装飾付大刀、馬具、鉄鎌などの金属製品（古墳

時代終末期前半～中頃）は、副葬された須恵器（古墳時代終末期後半～終末期末）よりも時期的に須恵器型式にして1段階古いことから判断して、初葬者の副葬品であった可能性が高いことがわかる。

また、大刀は象嵌装円頭大刀が目を引く程度で、それ以外は装飾がない拵えであること、馬具は轡と鐙の吊金具のみに金属製部品が用いられる非常に簡素な面繋であったことを確認したが、装飾付大刀と馬具ともに畿内王権との関係が考えられるものを保有し、また大刀4振、鉄鎌15点、両頭金具11点は地域内では副葬数が多いことから、武器類の副葬が充実していることを確認した。

のことから筧沢1号墳は、武人的性格をもって畿内王権との関係を深めていた、王権に奉仕していたと想定できる。

（2）筧沢1号墳の存在意義

筧沢1号墳の被葬者が畿内王権にとって、武人的性格を持って奉仕することで何が重要であったのか。

交通の要衝の管理者 筧沢1号墳が所在する朝比奈川東岸、高草山西南麓は、現在も新幹線、東名高速道路、国道1号線の主要幹線が通じているが、古代から江戸時代まで旧東海道が静岡方面に通じており、古から現代まで陸路交通の要衝である。筧沢1号墳が築かれた終末期以降、山麓を東に登った位置には、金銅装方頭大刀や鎔帶金具（鉸具）が出土した高崎3号墳などを含む高崎古墳群が所在し、その先の花沢地区では、古墳時代終末期後半から奈良時代にかけての所産と考えられる金銅製轡轡（中国・唐製の可能性あり。八幡1930、大谷2015、図12-19）が出土している。この地域には、古墳時代中期に谷山1号墳（旧高崎11号墳、焼津市史編さん委2004、滝沢2004）、後期前半に鈴鏡が出土した奥屋敷古墳（焼津市史編さん委2004）、金銅装頭椎大刀が出土したとされる坂本某墳が確認されるものの目立つ古墳は少ない。一方、筧沢1号墳が築造される終末期には古墳の造営が活発化する（滝沢2004、菊池2009・2010）とともに、筧沢1号墳の象嵌装円頭大刀、轡、高崎古墳群の装飾付大刀など目を引く副葬品を有する古墳が連続的に築造される。高崎古墳群の鎔帶金具からは被葬者が官人化していたことも想定される。これは、律令期における交通ルートの整備が、終末期前半以降にはすでに行われていた可能性が高いこと、この地域の集団が畿内王権のなかで一定の地位を得ていたことがわかる。このルートの管理

の必要性からこの地域が王権にとって重要視されていたのだろう。想像を逞しくすれば、その最初のルート管理者集団が筧沢1号墳の被葬者集団であった可能性も考えておくべきであろう。

なお、上述したように象嵌装円頭大刀・圭頭大刀副葬古墳の被葬者像として交通や東西交渉に長けた被葬者像を描いたが、筧沢1号墳の朝比奈川を挟んだ対岸にはやや離れているが小川駅があり、瀬戸川河口にも近く水陸の拠点に位置する。谷口原30号墳近くには初倉駅がおかれおり、この点からみても交通要衝の地を管理することが重要であったといえる。

また、後述するが志太地域も組み込まれたと想定される「稚賛屯倉」が設置された東駿河の浮島沼周辺の交通ルートが古墳時代後期末～終末期に整備されたことが想定されており（藤村2022）、この時期と一致することは、駿河東部・西部で連動して交通ルートの整備が進んでいたことがわかる。

畿内王権とのかかわり 筧沢1号墳は武人的性格をもって東海道ルートの管理者として畿内王権に奉仕していた可能性を想定したが、その出自や身分はどうであったのか。

駿河には律令期に諸国牧である「蘇弥奈」馬牧が設置されていたことが記録として残っているが、この馬牧は富士山麓～愛鷹山西南麓、あるいは安倍川西岸から志太地域に設置されたと想定されている。志太地域には瀬戸古墳群・内瀬戸古墳群、白砂ヶ谷古墳群の馬具の保有状況から想定した馬匹生産が行われていた可能性があり、馬牧が存在した可能性が高い（註5、岡安1986、大谷2003a）。岡安光彦氏は志太地域における馬具の集中と「金刺舎人」「他田舎人」の存在から、畿内王権を軍事的に支える「東国舎人騎兵」が存在した可能性を想定するが、氏族は不明であるが、この軍事的役割は主に瀬戸古墳群・内瀬戸古墳群などの被葬者集団が担っていた可能性が高い。一方で、筧沢1号墳被葬者は馬具は出土するものの、1点のみであり、周囲にも馬具出土古墳が多いわけではないことから馬匹生産の管理者という性格は読み取りにくい。

象嵌装大刀は「舎人」と関係するとする説がある（西山1986）。必ずしも古代の舎人の分布と象嵌装大刀の分布の相関関係を証明したものはないと思われるが、この地域に「檜前舎人」「金刺舎人」「他田舎人」が確認されており、筧沢1号墳の被葬者集団の一つの候補として興味深い。

また、物部氏本宗家滅亡後、物部氏が掌握していた

土地や部民 - 益津郡には物部郷が存在しており物部氏がこの地に居住していた可能性が高い - 、それらは上宮王家とかかわりの深い稚賛屯倉（富士川河口近く）の一部に組み込まれたと想定されている（岩宮 2010、仁藤 2004 など）。また、志太、益頭郡には、矢田部、刑部、など「○○部」を姓とする人びとが存在することが知られており、古くから畿内王権への従属性が強かったことが想定されている（岩宮 2010、仁藤 2004 ほか）。『図説藤枝市史』では、筧沢 1 号墳の所在地は律令期には「物部郷」に比定され、そこには「物部」や「宇治部」の居住が想定されており、筧沢 1 号墳の被葬者集団はその部民の長であった可能性も一案として興味深い。

最後に、論理が飛躍したことは否定しえないが、筧沢 1 号墳の価値を考えるために複数の視点での再検証が必要であることは言うまでもない。今後の考古学と文献史学など諸学問の調査研究の深化と協働により描き出していく必要があるが、本稿では筧沢 1 号墳の被葬者像について出土した遺物を中心に描き出した。本稿での報告が今後の志太地域の歴史、ひいては駿河地域、日本列島の歴史の解明の一助となれば幸いである。

謝辞 本稿を執筆するにあたり、筧沢 1 号墳出土遺物の実測及び写真等の掲載について、焼津市文化財課及び歴史民俗資料館に御協力・御高配いただいた。また、下記の個人に文献の収集、類例調査等でお世話になりました。銘記して深謝いたします。

岩木智恵 菊池吉修 篠ヶ谷路人 柴田亮平
鈴木 源 平林大樹 細田和代

註

- 1 報告書（焼津市教委 1993）、『焼津市史』資料編 1（焼津市史編さん委 2004）には、象嵌鍔のみ報告されている。焼津市史刊行後、保存処理を行う際に円頭柄頭に象嵌が施されることが判明した。保存処理前段階で片山健太郎氏が金属製品について報告している（片山 2012）。
- 2 実際の遺物の観察では、佩裏側の象嵌の表出は行われておらず、文様が確認できない部分は、表出されていないではなく保存処理段階で失われた可能性がある。
- 3 藤枝市瀬戸古墳群については、発掘調査後現在まで古墳名が整理されており、『藤枝市史』資料編（藤枝市編さん委 2007）及び八木勝行・菅原雄一両氏の整理（八木・菅原 2006）の古墳名とした。

筆者は、前稿（大谷 2023a）で瀬戸古墳群とした古墳群は、ここでは「内瀬戸古墳群」、馬骨が出土した瀬戸 C 1 号墳は、

本稿では「内瀬戸 1 号墳」に変更しているので留意願いたい。

- 4 茎関数で 15 点としているうち鍔身部は 6 点確認されており、平根式や片刃箭式以外は確認できないことから尖根片刃箭式のみと判断した。
- 5 仁藤敦史氏は、『焼津市史』通史編上巻（仁藤 2004）で、『類聚国史』巻百五十九田地部上牧田の天長八年（831）九月丙午条に「駿河国荒廃田町を墾開せしめ、大野牧となす」とあり、『和名抄』には志太郡に「大野郷」があるので当地に否定することも可能である」としており、この大野郷は、瀬戸古墳群の北側、白砂ヶ谷古墳群の瀬戸川をはさんだ対岸に比定されている（岩木 2010、藤枝市史編さん委 2013）ことから、「大野牧」の設置記事と時期的に隔たりがあることや、この牧が志太郡に存在した確証はないものの、「大野牧」の前身となる馬牧が存在した地に築かれたとすれば、筆者の想定とも合致する。

参考文献

【論文】

- 諫早直人 2012 「統一新羅時代の馬具製作」『文化財論叢』IV 奈良文化財研究所
- 岩木智恵 2010 「志太郡・益頭郡の郷里と集落」『藤枝市史』通史編上 原始・古代・中世 藤枝市
- 岩原 剛 2005 「東海地方の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳』 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 岩宮隆司 2010 「大和王権と藤枝地域」『藤枝市史』通史編上 原始・古代・中世 藤枝市
- 大谷 猛 1985 「日本出土の『鑓轡』について」『論集日本原史』吉川弘文館
- 大谷宏治 2008a 「原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格」『原分古墳調査報告編』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2008b 「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40 静岡県考古学会
- 大谷宏治 2011 「象嵌装大刀の変遷」『考古学ジャーナル』No.616 ニューサイエンス社
- 大谷宏治 2015 「古墳時代後期以降の鉸具式・板状掛留式立闇鑓轡の特質」『河上邦彦先生古稀記念論文集』 河上邦彦先生古稀記念論集刊行会
- 大谷宏治 2018 「東平 1 号墳副葬大刀と馬具からみた被葬者像」『伝法東平 1 号墳』 富士市教育委員会
- 大谷宏治 2019 「鉸具造立闇環状鏡板付轡の成立について（試論）」『和の考古学』ナベの会
- 大谷宏治 2022 「須津古墳群における馬具副葬古墳被葬者の性格」『須津千人塚古墳』 富士市教育委員会
- 大谷宏治 2023a 「馬具の組合せと評価」『豊橋市寺西 1 号墳の研究（2）』 愛知大学総合郷土研究所
- 大谷宏治 2023b 「鉄製武器・馬具多量副葬古墳の意義」『豊橋市寺西 1 号墳の研究（2）』 愛知大学総合郷土研究所

- 大谷宏治 2024 「圈線C字文系象嵌鍔付大刀の特質」『三河考古』33 三河考古談話会（刊行予定）
- 大谷宏治・西澤正晴編 2001 「東海地方における後期古墳データベース」『東海の後期古墳を考える』 東海考古学フォーラム三河大会実行委員会
- 岡野秀典 1994 「米倉山出土の銀象嵌刀鍔」『丘陵』14 甲斐丘陵考古学研究会
- 岡安光彦 1984 「いわゆる『素環の轡』について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 岡安光彦 1985 「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』2 古墳文化研究会
- 岡安光彦 1986 「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵」『考古学雑誌』71巻4号 日本考古学会
- 片山健太郎 2012 「焼津市箕沢1号墳の出土遺物について」『焼津市歴史民俗資料館年報』25 焼津市歴史民俗資料館
- 川江秀孝 1992 「飾大刀」『静岡県史』資料編3 考古3 静岡県
- 菊池吉修 2008 「原分古墳出土の鉄鏃について」『原分古墳調査報告編』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 菊池吉修 2009 「古墳が語る藤枝の歴史－交流と独自性－」『藤枝市史研究』10 藤枝市教育委員会
- 菊池吉修 2010 「群集する古墳と政治秩序の確立」『藤枝市史』通史編上 原始・古代・中世 藤枝市
- 菊池吉修 2016 「中原4号墳出土鉄鏃について」『伝法中原古墳群』 富士市教育委員会
- 児玉利一 2018 「珍しい古墳副葬品の数々 諏訪市小丸山古墳」『長野県の埋蔵文化財情報誌 信州の遺跡』13 長野県埋蔵文化財センター
- 児玉利一 2022 「諏訪市小丸山古墳出土品 判断した推古朝の盟主の副葬品」『長野県の埋蔵文化財情報誌 信州の遺跡』18 長野県埋蔵文化財センター
- 古柳塚古墳研究会 2004 「古柳塚古墳の研究」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』22 帝京大学山梨文化財研究所
- 齊藤大輔 2017 「古墳時代刀劍研究史」『土曜考古』39 土曜考古学研究会
- 斎藤 弘 1986 「古墳時代の壺鎧の分類と編年」『日本古代文化研究』3 古墳時代研究会
- 菅原雄一 2006a 「馬具集成 西駿河」『東海の馬具と飾大刀』 東海古墳文化研究会
- 菅原雄一 2006b 「飾大刀集成 西駿河」『東海の馬具と飾大刀』 東海古墳文化研究会
- 鈴木一有 2008 「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳調査報告編』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』 浜松市教育委員会
- 高橋 満編 2002 『弘法山のよこあな』 福島県文化財センター白河館
- 滝沢 誠 2000 「総括」『井田松江古墳群』 戸田村教育委員会
- 滝沢 誠 2004 「焼津周辺の古墳と遺跡の展開」『焼津市史』資料編1 考古 焼津市
- 瀧瀬芳之 2019 「日本列島内出土象嵌遺物集成（刀剣・鉢・刀子編）」『文化財と技術』9 工芸文化研究所
- 東海古墳文化研究会 2006 『東海の馬具と飾大刀』
- 富田和氣夫 2001 「まとめ」『史跡須曾蝦夷穴古墳II』能登島町教育委員会
- 豊島直博 2017 「双龍環頭大刀の生産と国家形成」『考古学雑誌』99巻2号 日本考古学会
- 豊島直博 2019 「頭椎大刀の生産と流通」『考古学雑誌』102巻1号 日本考古学会
- 西山克己 2016 「象嵌装大刀を持ったシナノの舎人たち」『研究紀要』22 長野県立歴史館
- 西山克己 2017 「象嵌装大刀を持ったシナノの舎人たち2」『研究紀要』23 長野県立歴史館
- 西山要一 1986 「古墳時代の象嵌」『考古学雑誌』72巻1号 日本考古学会
- 西山要一 1996 「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（一）」『青丘学術論集』9 韓国文化研究振興財団
- 仁藤敦史 2004 「ヤマトタケルの東征伝承と宮号舎人」『焼津市史』資料編1 考古 焼津市
- 橋本博文 1993 「亀甲繋文象嵌大刀再考」『翔古論集』 久保哲三先生追悼論文集刊行会
- 藤村 翔 2022 「愛鷹山古墳群の被葬者集団とその生産基盤」『須津千人塚古墳』 富士市教育委員会
- 森 幸彦 2003 「福島県内出土の象嵌資料」『研究紀要2003』 福島県文化財センター白河館
- 宮代 栄一 2013 「将軍山古墳出土の馬具とその馬装」『古代の豪族』 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 八木勝行 2007 「古墳時代 遺跡の概要」『藤枝市史』資料編1 考古
- 八木勝行・菅原雄一 2006 「瀬戸古墳群B-17号墳」『藤枝市文化財年報 平成16年度』 藤枝市教育委員会
- 矢田 勝 2010 「志太平野における交通路の復元」『藤枝市史』通史編上 原始・古代・中世 藤枝市
- 中山敏史 2010 「志太郡・益頭郡の成立」『藤枝市史』通史編上 原始・古代・中世 藤枝市
- 八幡一郎 1930 『日本考古資料図鑑』 5 馬具

【発掘調査報告書・市町村史】

- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 『入野東古墳群 入野高岸古窯』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『原分古墳調査報告編』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『衣原古墳群 衣原遺跡 衣原古窯群』
- 島田市教育委員会 1991 『白岩寺古墳群発掘調査報告書』
- 島田市教育委員会 2010 『市内遺跡発掘調査報告書』43
- 池上遺跡 宮裏古墳群 谷口原古墳群 宮上遺跡2 宮上遺跡3

島田市教育委員会 2017 『市内遺跡発掘調査報告書 城山古墳 駒形2号墳』
遠江考古学研究会 1965 『島田市水掛渡古墳群発掘調査報告書』
能登島町教育委員会 2001 『史跡須曾蝦夷穴古墳II』(石川県)
藤枝市教育委員会 2005 『仮宿沢渡古墳群・仮宿沢渡遺跡 仮宿堤ノ坪遺跡・仮宿堤ノ坪古墳』
藤枝市教育委員会・静岡大学考古学研究室 2002 『莊館山1・2号墳発掘調査報告書』
藤枝市史編さん委員会 2007 『藤枝市史』資料編1 考古
藤枝市史編さん委員会 2013 『図説藤枝市史』 藤枝市
富士市教育委員会 2018 『伝法東平第1号墳』
焼津市教育委員会 1993 『箕沢古墳群II』
焼津市教育委員会 2018 『焼津辺文化遺産ガイド 高草山周辺ルート』
焼津市史編さん委員会編 2002 『焼津市史』通史編 上巻
焼津市史編さん委員会編 2004 『焼津市史』資料編1 考古 焼津市
焼津市歴史民俗資料館 1987 「昭和60年度の発掘調査概要」『焼津市歴史民俗資料館報』I

図の出典

- 図1・2 筆者作成
図3 焼津市教委 1993・片山 2012 より抜粋
図4 片山 2012 より抜粋、象嵌装円頭大刀の柄頭のみ本書
図5・6 筆者作成
図7・8 須曾蝦夷穴古墳（能登島町 2001）、古柳塚古墳（古柳塚古墳研 2004）、原分古墳（静岡県埋文研 2008）、箕沢1号墳（柄頭・本稿、鍔・川江 1992）、東平1号墳（富士市 2018）、上蟹沢古墳（高橋編 2002）、鷹ノ巣古墳（西山 1996、橋本 1993）
図9・10・12 翁山9号墳（藤枝市史編さん委 2007）、衣原11号墳（静岡県埋文研 2010）、宮裏6号墳・谷口原30号墳（島田市 2010）、花沢出土（大谷 2015 の図を再トレース）、箕沢1号墳（本稿）、左記以外（東海古墳文化研究会 2006）
図11 筆者作成
写真1 焼津市提供